

写真家

山本 春花氏

PROFILE 東京都生まれ。雑誌・書籍を中心にフォトグラファーとして活躍。写真やカメラなどの書籍、ムックの出版を行なう『snap!』のメンバーとして、企画・編集に参画。音楽イベントのスチールやファッションブランドのルックブックなども手掛ける。2014年4月から、自身のブログで若い女性モデルを被写体としたポートレートシリーズ『乙女グラフィー』(http://haruka146.jugem.jp)の連載を開始(現在も継続中)。『写ルンです』の魅力之余すところなく紹介したムック『31年目の写ルンです』(エイ出版社/2017年2月発行)の企画・編集・撮影に参加し好評を博す。個展・展示会はこれまで『台湾フォト(2014年9月)』『乙女グラフィー展(2015年4月)』『二人のたけすえしお(2015年6月/企画展示)』『乙女グラフィー展 with ポバイカメラ』(2015年8月/企画展示)などが開催されている。



老いを見つめ、大好きなフィルムカメラで60歳になっても「乙女」を撮り続けたい。

「私、写真家になるので会社を辞めさせていただきます」

編 山本さん、たとえば『乙女グラフィー』。カメラ女子が憧れる“いまどきの女性フォトグラファー”という印象が強いのですが、その一方で、デジタルではなくフィルム写真での表現を追求する“こだわり派”といったイメージもあります。感性的なものと理論的なものを両得しているということは、かなり早い時期から写真に取り組まれてきたのではないですか？

山本 実は私、写真の専門学校に通ったこともなければ、特定の写真家に付いて勉強や修行をした経験もないんです。子どもの頃は絵が好きだったので、イラストレーターになりたいという夢はありましたが、高校に入学すると周囲にイラストの上手な人がたくさんいて、とても敵わないと思いました。結局、4年制の大学に進み、このまま就職して結婚もして、平凡な家庭を持つのだろうなど漠然と考えていたんです。そういう意味では、ごく普通の“乙女時代”を過ごした、ということでしょうね。

編 では大学卒業後も普通の就職をしたわけですか。写真やカメラとは関係のない。

山本 はい。旅行代理店に就職したんですが、華やかなイメージとは違い仕事がとんでもなくハードで、毎日、必死で働きました。その息抜きにしかったのか、何となく始めたのが写真だったんです。入社した年の冬のボーナスで、店員に勧められるままにミラーレスのデジタルカメラを買って。でも、2年目に、新店舗を立ち上げるための部署に配属されると、ますます仕事がきつくなり、写真も思うように楽しめなくなっていきました。そして3年目に入ると、もう肉体的にも精神的にも限界だったんでしょう、重い胃腸炎になったり熱が出て下がらなくなったりして(さすがにこれでは仕事を続けられない、思い切って辞めよう)と決心したんです。決心したものの、つらいのは同僚たちも同じなので「つらいから辞める」とはなかなか言えません。そこで、趣味で撮っていた写真を理由にしようと思いつき、「写真を極めたいんです!写真家になりたいので辞めさせていただきます!」と、勢いで(笑)。

編 それはまた大胆な辞め方ですね。実際に写真家として独立する予定もないのに先に宣言してしまったわけですか。

山本 言ってしまったからには、本当に写真家になるぞ、頑張らなくっちゃという気持ちになれましたから、宣言してよかったと、いまでは思っていますが。

空前のカメラ女子ブームに乗り 「めっちゃいいなあ」とフィルムの世界へ

編 そうは言っても、まったくその気がないのに「写真家になるから」なんて思いつかないでしょう。在職中、苦しい仕事の合間にどんな写真を撮っていたんですか？

山本 いわゆるテーブルフォトですね。花とか料理とか、自分の周りにあるものを、テーマも決めずに感性のおもむくままに撮っていました。あとは、風景写真とかも。

編 誰か憧れのカメラマンは、いたんですか？

山本 特定のカメラマンから影響を受けたわけじゃなく、そもそも私が写真を撮ってみようかなと思った頃は、まさにカメラ女子ブームの全盛で、まあいまもまだ続いていますけど、淡い感じの写真が大流行した時代だったんですね。

編 ありましたね。ややハイキーな仕上がりで。雑誌で言うとクウネル系みたいな。

山本 そうです、そうです。あっさり、ほわんとしていて、あまり彩度がなくて、ちょっと青っぱいというか。そういう写真を自分で撮ってみたいなあというのがきっかけだったんですよ。まずはデジカメでいろいろ試してみたんですけど、どうも、ふわっとした感じに写らない。ブログとか読んでいて、カッコいいなあ綺麗だなあと思う人の写真は、いろいろ調べていくと、フィルムカメラで撮ったものでした。人気のカメラは『ナチュラ・クラ



シカ』という、当時、富士フィルムさんが出していたものです。

編 普通に撮っても、当時の“いまだき”のお洒落な写真が撮れるよう設定されていた機種ですね。

山本 ナチュラで撮っているカメラ女子がたくさんいて、それを見て「めっちゃいいなあ」と思い、自分でもすぐ購入して(笑)。

編 デジタルカメラからフィルムカメラに持ち替えたわけですね。でも、一般的には、フィルムでの撮影には、それなりのノウハウが必要だと言われていますが。

山本 まったくの初心者だからなのか、私にはフィルムの方が簡単だったんですよ。露光が極端にアンダーにならないければ、たいてい何とかなるし。さすがに6段オーバーぐらいだとやばいですが(笑)。あとは、一度やってしまったんですけど、フィルムを逆に巻いてしまわないように注意するとか(笑)。それ以外は、ずっと失敗せずに撮れてきたので、デジカメに比べて難しいと感じたことはありません。アマチュアにとっては、むしろデジカメの方が、仕上がりが似たような感じになってしまい、個性が出にくいのではないですかね。

どんなに珍しい写真が撮れても それが“個性”になるわけじゃない

編 フィルム派のカメラ女子に転向して、どんな写真を撮り始めたのですか？

山本 旅行代理店で働いていたので、やっぱり旅系の写真ですね。まずは北欧に行って撮ってみようと、いかにもカメラ女子っぽく(笑)。

編 フィルムで、いきなりいい写真が撮れたんですか？

山本 撮れました。というか、そのときは「いい写真」と思い込んでいました。当時、撮った写真をコンテストに出してみ、ということたまにやっていたんですが、そのアイスランドの写真も、富士フィルムの『“PHOTO IS”想いをつなぐ。30,000人の写真展』※に応募してみたんです。そしたら、撮影場所が思いっきり他の人とかぶっていたんですよ。もうがっかりきてしまって(笑)。※2017年現在は『50,000人の写真展』

編 「これはオリジナリティある写真だ、会心の作品だ」と自信があったのに？

山本 自分の個性が出ている、と錯覚していたんですね。旅行代理店に勤め、北欧なんか行って、デジタルじゃなくフィルムカメラで撮影する。これは私の個性だよ～みたいな感じで発表していたんですけど、アイスランドなんで誰でも行けるし、誰でもという語弊がありますが、別に旅行代理店の人じゃなくても行ける。学生でも行ける。そういう場所でいくら美しい、珍しい風景が撮れたからといって、それが自分の個性になるわけじゃないんだな、ということに気づいちゃった。他とかぶるような写真を、わざわざ人に見てもらう必要があるのかと。

人とかぶったって、きれいな写真が撮ればそれでいいと言う人もいっぱいいるだろうし別に悪いことではないけれど、私は、それで満足したくないと、そのとき思ってしまったんです。

未練や感謝の気持ちを投影できた初のポートレートで、初の個展を

編 無意識の中で、プロ意識に目覚め始めたのでしょうか。

山本 写真を仕事にしようなんて思っていなかったのですが、プロ意識とは違うかもしれないけれど、ただ、自分にしか撮れない写真みたいなのを探していけたらいいなあと、漠然と考え始めたのは確かです。それ以来、風景写真とかテーブルフォトとかは辞めてしまい、ポートレートの方に興味が移っていきました。

編 風景や物撮りと人物写真とでは、どんなところに違いがあるんですか？

山本 人を撮っていると鏡のように自分に返ってくるものがあるんです。相手に向き合いながら自分の内面も写し出せる、というのかな。

編 ポートレートを中心にし始めたのは、在職中のことですか？

山本 退職後ですね。実は旅行代理店を辞めたあと半年ぐらいして、なぜか急に職場に戻りたくなくなってしまった時期があったんですよ。

編 え〜？つらくて苦しくて仕方なかったの？

山本 あれはあれで案外楽しかったな〜とか思ったりして（笑）。写真家になります宣言をしたものの、まだニートみたいな生活をしてたから、一瞬、気持ちが揺らいだのかもしれない。そのときの心理が、わりと自分の中でおもしろくて。なんで戻りたいんだろうと考えてみると、忙しいときに抜けてしまってみんなに申し訳なかったというのもあったし、辞めたら辞めたでせつないなっていう感傷みたいなものもあったりして。

編 実際、復帰のために行動したんですか？

山本 いえ、戻ってしまったら、まったく意味ないですから。でも、帰りたいと思ったのも何かの縁かと、お世話になった人の写真を撮らせてもらうことにしたんですよ。一人ひとり、10人ぐらい。新店舗を立ち上げるとき一緒に必死で頑張った人たちの。それで、撮った写真の中から一人一枚ずつ選んで、飾って、初めて小さな個展を開いたんですね。ごく普通のポートレートなんだけど、なんて言うんですかね、私の“仕事への未練”とか、同僚に対する「ごめんね、ありがとう」という気持ちとか、いろんなものが混ざり合った味わい深いポートレートでした。楽しいからとか記念になるからといって人を撮るのじゃなく、初めて、自分の内面的なところで写真を撮れたと言うか。いま思うと、そこが私の写真の原点、スタート点になったんじゃないかなという気がします。



写真の技術も雑誌編集のノウハウもベテランライターから教示を受ける

編 「写真を究めたいから退職します」というのが無謀な宣言だったのかと思ったら、お話を聞くと、自然な流れでプロ意識に目覚め、ご自分の個性を見だし、なるべくしてフォトグラファーになったのではありませんか。ところで、個性や感性の部分とは別に、カメラの理論や基本的な技術などはすべて独学で身に付けたのでしょうか。

山本 退職前後の時期に、何人か写真関係の方と知り合う機会があって、その一人に、写真系の入門書や教科書、雑誌の記事を執筆しているライターさんがいたんです。写真家ではないけれどこの道20年のベテランで、当然、カメラやレンズのことから、ライティングなどの撮影技術にいたるまで何にでも精通している人だったので、彼から、短期集中で系統立てて、写真全般について教えていただきました。彼が編集の仕事もしていた関係で、写真のことを教わりながら、雑誌やムックの編集に関わらせてもらえたのも、私にとっては大きかったですね。雑誌編集のノウハウやコピーワークなどについて、実践の中で学ぶことができたわけですから。



編 写真が撮れる、文章も書ける、雑誌やムックの企画編集も行なえる。これは、現在の山本さんの最大の強みでもあります。実際、今年(2017年)の2月にエイ出版から発行された『31年目の写ルンです』は、山本さんが企画から編集、そしてインタビューや執筆、撮影まで、すべてに関わっていらっしゃいます。

山本 このムックは、男性編集長とエイ出版の女性と私、3人でつくったんですが、はじめに出版社の方から「何か一冊出してほしい。できればカメラ系のものがいい」と依頼が来たんですね。私が思いつきで『写ルンです』がいいんじゃない?』と言ってみたんです。こんなに長く人気があるのに、まだ一度もムック本が出ていなかったし、その年ちょうど発売30周年だったというのもありましたから。そしたらそれが通り、「あなたが言い出したものだから、じゃあ具体的な企画を出して」、みたいなことになっちゃって(笑)。

『写ルンです』は、ある意味、最強。撮り続けることで見えてくる世界がある

編 なるほど、それで自ら編集や原稿執筆、写真撮影などを手掛けることになったと。製作期間中は、大変だったのではないですか?



山本 大変なんというものではありませんでした(笑)。もちろん私一人の作業ではないんですが、納期もかなり短く、逆に、内容は盛りだくさんだったので。

編 『31年目の写ルンです』、拝見しましたが、確かに内容が濃く、見ても読んでも楽しいムックに仕上がっていますよね。タレントさんやモデルさんたちが自ら『写ルンです』で撮った個性的な写真が、ファッションブルにレイアウトされていたり、みうらじゅんさんなど、気鋭のクリエイターやタレントさんへの興味深いインタビューがあったり。この1冊全体を通じてとくに山本さんが訴えたかったことは何なのでしょう。

山本 『写ルンです』は、「写真が好き、フィルムカメラが好き」という人たちに、まず最初に手に取ってほしいカメラなんです。だから内容も、若い人たちに伝わるようにビジュアル重視で、ファッション雑誌っぽく“見て・感じてもらえる”ような紙面づくりを心がけました。

編 プロから見ても『写ルンです』は“使えるカメラ”なんですか？

山本 シャッターを切るときの微妙なタイムラグがほとんどないじゃないですか。たとえば人物のスナップショットで、向き合った相手が最高の表情をした瞬間、「あっ、いいな」と思ったその瞬間にカチャッと撮れる。露出もピントも気にしないで。こんなことができるなんて、デジタルとかフィルムとかに関係なく、ある意味、最強のカメラですよ。流行だからといって手に取り、下火になったからと捨ててしまうのはもったいないし、好きになったらずっと撮り続けてほしいんですね。つねに持ち歩いて、友だち撮って「イエーイ！」みたいな(笑)。カメラって本来はそういうものなんで。難しいこと考えず周りのものを撮る。で、上がってきたものが楽しければそれでいい。そうして、本質に気づいていく。自分の身の回りにこんなものがあったのかとか、自分はいまこういうことに興味があるのかとか。そう思えるためには撮り続けないとだめですね。だから若い人たちに日常を撮り続けてほしいな、っていうのはすごくあります。そういう撮り方に最適なのが『写ルンです』なんだと思います。



31年目の写ルンです(エイ出版社)





レンズを通して乙女を観察してみたら 「な〜んだ。年取ったって、いいじゃない」

編 「撮り続けることで見えてくる」と言えば、山本さんには『乙女グラフィー』という、人気のポートレート作品がありますが、シリーズとして長く撮り続けていますよね。退職後、元同僚たちのポートレートを撮影したときに初めて“内面的な部分”で写真が撮れたとおっしゃっていましたが、相手がうら若き乙女でも、やはりご自分の内面が大事なんですか？

山本 『乙女グラフィー』は、4年近く前、私が26歳になった頃から撮り始めたんですが、テーマは、実は『老い』なんです(笑)。

編 「おい」って、歳をとる、あの「老い」？26歳で？!

山本 はい。その頃から、急激に、自分に老いを感じるようになってきて(笑)。顔の小じわが目立ち、肌の張りも弱くなり、水着を着たときの背中贅肉とかに気づいちゃったりして(笑)。肉体的な衰えばかりでなく、25~26歳になると周りの人から「若いからしょうがない」みたいなことを言われなくなってきますよね。自分が、明らかにそういう領域に入り、ちょっと不安になってきて。いろんなところの梯子をいっせいに外されたというか。そこで思いついたんです。不安から目をそむけず、あえて、若さの絶頂にいる女の子たちを撮ってみよう。いまの自分と何がどう違うのか。それがわかれば、自分

の中で何かがふっさきれ、新たな一歩を踏み出せるんじゃないかな、と考えたんです。

編 街中で漠然と“ウォッチ”するのじゃなく、フォトグラファーだからレンズを通して、自分の内面を写し出しながら“観察”してやろうと。

山本 本人を可愛くってあげようとかじゃなくて(笑)。いまはこんなに可愛いけど、あんたらだって5年後・10年後はな〜みたいな(笑)。調査のようなものだから、カメラを向けながら、初対面でもいきなり「彼氏はいるの?どんな人なの?どこに住んでいるの?」なんて平気で聞いちゃいますね。実際に、気になりますから。いまどきの若い女の子が何を考え、どんなことに興味を持っているのか。シャッターを押しているより、彼女たちと喋っている時間の方が多いかもかもしれません。

編 そうして撮り続けることによって、老いについて、何か結論は得られましたか。

山本 意外とすぐにわかっちゃいました(笑)。きわめて当り前の答えでした。「な〜んだ。年取ったって別にいいじゃない。人間、見た目だけじゃないし」って。無駄な抵抗をせず、目の前の現実を素直に受け入れればいいんだと。

編 「アンチエイジング」ではなく「ウィズエイジング」、年齢とともに美しく生きるということですね。

山本 そういうシンプルな考え方を、私は『乙女グラフィー』

の撮影から学んだような気がします。でもこれで“学び”が終わったわけではなく、40歳の私から見た20歳、50歳になったときに感じる20歳、というのがきつとあると思うんですね。だから私は60歳になっても80歳になっても、ずっと乙女たちを撮り続けていくつもりです。そうすることで自分の年表というか、ストーリーが出来上がっていくんじゃないかと思って。いつまで生きられるかわかりませんが、『乙女グラフィィー』は死ぬまでやっていきたいですね。60とか70になったときにどんな写真を撮っているのか。年取ったときの自分が、いまから楽しみでもあるんです。

フィルムは不思議で奥深い。 その場の空気も、人の本心も写し出せる

編 「古い」という“重い”テーマが“軽く”解決したあと(笑)、次の撮影のテーマは何か決めているのですか。

山本 はい。私の場合、テーマが決まらないと撮り始められないタイプなので。でも、なかなか決まらないんです。自分の世界に入って、ひたすら突き詰めて考え、うつ状態みたいにならないと出てこない(笑)。それでいまは、できるだけ無理しないで写真を撮ろうかなと思って。二つ方向性があるんですけど、一つは「華麗さ」、もう一つは「日常」です。

編 華麗さということは、内面性よりも、あえて流行的な、ファッション的なものにフォーカスしようということですか？

山本 人って、見た目に華やかなものに理屈抜きで惹かれるじゃないですか。本質的じゃないんだけど、きれいで、つい見入ってしまうような、そんな写真を、ひたすら撮ってみる。それを自分で納得できるまでやってみて、でも、それはそれで一回やったらいいや、とっていて。

編 もう一つのテーマ「日常」というのは、逆に、ずいぶん地味ですね(笑)。

山本 最近、ようやく「日常」を撮る気になってきたんです。身の周りの半径何mか、家の周りだけの世界。私、この歳になって気づいたんですけど、人と接するのがあまり好きじゃないかもって(笑)。いろんな人とお仕事して、モデルの知り合いもいっぱいいるんですが、基本的に独りが好きな人、だったんです。

編 なんだか、すごく意外ですね(笑)。

山本 で、そんな私が、自分の部屋で起きる出来事を撮るんだけど、毎日、別に大したことは起きていない。同棲中の男性が肝臓を壊して、ふと「死」を身近に感じたとか、近所の猫が遊びに来たとか、そんなことぐらいで。そういう、「狭い部屋だけど、とくに変わったこともないけれど、それで満足」みたいな、孤独感や閉塞感みたいなものを写真で伝えられたらいいかなあと。これがいまのあたしの姿なんだよって。

編 もちろんこれまで通り、フィルム写真で。

山本 はい。あくまで私の感覚ですが、とくにいま愛用中の中判フィルムカメラは、人の明るさだけでなく、暗さ、せつなさ、怖さみたいなものまで写し出せるんです。その場の空気感、相手や自分の本心なんかも含めて。ああ、この撮影のときこの人は、私は、こんな気持ちだったのかと、後でプリントの仕上がりを見て気づくことも、よくあります。フィルム写真って、本当に不思議。奥が深いですよ。

編 フィルムを使った新たなテーマの作品が次々と発表されることを、これからも期待しています。そしていつの日か『31年目の乙女グラフィィー』が出版されるのを、楽しみにしています(笑)。本日は、長時間にわたり、ありがとうございました。

